

ありふれた営みもしくは Vita Activa ——「マルタとマリア」、エックハルトの義解——

竹山 重光

Vita Activa ——Eckhart's Exegesis of *Martha and Mary*—— Shigemitsu TAKEYAMA

Abstract

It is through ordinary activities that human being gets into relations with the world. Those day-to-day activities are not conspicuous, but basic for the human-being. A tiny tale in The Gospel according to St. Luke, *Martha and Mary* shows us an impressive figure of those activities. Meister Eckhart's exegesis of this tale, of which we treat mainly in this essay, puts forward a noteworthy thought about those activities. He considers it as a manifestation of human perfectness. Martha, not Mary, embodies human perfectness, which has a dynamic double structure. Martha is a woman. This fact gives us another problematique. We deal with it also.

1 はじめに

本稿は二つのテキストを取り扱う。一つは、新約聖書ルカ伝 10:38-42 に記された短い一節、一般に「マルタとマリア」(Martha and Mary)の物語として知られているテキストである*¹。もう一つは、この物語について中世ドイツの神学者マイスター・エックハルト (Meister Eckhart, c.1260-c.1328) がドイツ語で行なった説教のテキスト、以下で明らかになるが、この物語について大胆な解釈を施し、注目すべき思想を提示した義解のテキストである。

考察は以下に述べる観点を設定して行なわれる。

現実にこの世界に存在している人間は、この世界から消え去るまでのあいだに多種多様な物や事柄に面し、それらに関わり、携わり、こなしていく。それら物や事柄の多種多様さに応じて、人間がなす営みは多種多様である。そうした多種多様な営みのうちで、人間として現にこの世界に存在するかぎり他にどうしようもなく、日常的に行なっている営み、つまり、ごくありふれた、目立たない、取り立てて注意が払われることもないであろう営みに、本稿は注目する。

そういう営みは、その最も原初的なかたちでは、子どもがはまだ自己意識的にならないうちからも試行錯誤を繰り返しつつ、身につけていく営みである。そういう営みは、ごく単純な意味合いで、人間として存在していくことの基本的な次元にある営みである。そして、そういう営みのおそらくすべてが、実は「技術的」営み

*¹ ここで「マルタとマリア」とするか「マリアとマルタ」とするかで、実はすでに読み方に違いが生じうるのだが、本稿では特段の意図は込めずに、前者で統一する。

である。人間がこの世界に存在していくことの、あるいは、日本語としてももう少し普通の表現をすると、この世に持っていくことの基本的次元には、「いかに持するか」という技術的なものが確実に存在する。これを科学技術的と形容することは、少なくともただちにはできない。したがって本稿は、現代の世界と歴史を突き動かしている力である科学技術と直接に切り結ぶことはできない。けれども、現代の科学技術もまた、人間がいかに世に持するか、つまり「人間と世界との関わり」と名状してよい問題圏にある事柄であろう。そうだとすれば、本稿における考察の試みも一定の現代的意義をもちうるだろう。世に持っていくことの基本的次元にある、それゆえにありふれた技術的営みを、どのように捉えるのか。どう位置づけるのか。そうした営みは人間の現実存在にとってどのような意味をもちうるのか。こうした問いの観点はまた、すでに「身につけていく」という語を用いたことから知られるように、「からだ」(Leib)^{*2} という問題圏にも連関する。本稿が注目する営みは、からだと密接に関係する営みである。その関係について、からだ「によって」という言葉を用いるべきか、からだ「において」と表現するべきか、それとも他に何か適切な言い方を探すべきか、そうした論点はここでは扱わない^{*3}。とりあえずドイツ語を借りるなら、leiblich という形容詞をもって指し示すことができる側面をそれら営みはもっている。この側面にも留意したい。

以上述べたような観点のもとで、最初に挙げた二つのテキストを考察する。エックハルトの義解は長文であり、議論も入り組んでいるので、その全体を検討することはできない。本稿の観点のもとで浮かび上がってくるテキストを取り上げ、考察を試みるにとどまる。

2 マルタとマリア

2.1 物語

まずは、マルタとマリアの物語全文を挙げよう。

さてみな旅行をつづけるうち、イエスがある村に入られると、マルタという女が家にお迎えした。マルタにマリアという姉妹があった。マリアは主の足もとに座ってお話を聞いていた。するといろいろな御馳走の準備で天手古舞をしていたマルタは、すすみ寄って言った、「主よ、姉妹がわたしだけに御馳走のことをさせているのを、黙って御覧になっているのですか。手伝うように言いつけてください。」主が答えられた。「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を配り、心をつかっているが、無くてはならないものはただ一つである。マリアは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない」^{*4}。

短く小さな物語だが、印象深い。聖書には記憶に残り考察を喚起する物語が数多いが、中でもよく知られているものの一つである。絵画にもよく描かれている。参考として、フェルメールのものと、本稿筆者が最も好むデニスのものを挙げておく(図1および図2)。

物語に登場するのは、救い主イエス、マルタ、マリアの三人である。イエスの弟子たちもマルタとマリアの家に入ったはずだが、テキストでは彼らについてまったく語られない。彼女たち二人は姉妹とされているが、どちらが年長であるのか、テキストそのものからは判断できない。ただし、伝統的には、マルタが姉でマリア

^{*2} 私は「からだ」という言葉と「身体」という言葉とを区別して用いる。これはドイツ語の Leib と Körper を念頭に置いてなされた区別である。また、ドゥーデン [2] の所論も念頭に置いている。

^{*3} どのような言い方をしようとも、リシール [8] の言う「超過」(excès) のゆえに、からだはその言い方からあふれ出してしまうのかもしれない。

^{*4} [9, pp.216–17] による訳文。ただし、「マリヤ」を「マリア」と改めた。引用文献を含め、本稿全体を通じて「マリヤ」ではなく「マリア」と表記する。



図 1: Vermeer van Delft. *Christ in the House of Mary and Martha*, 1654-55?. The National Gallery of Scotland, Edinburgh 所蔵

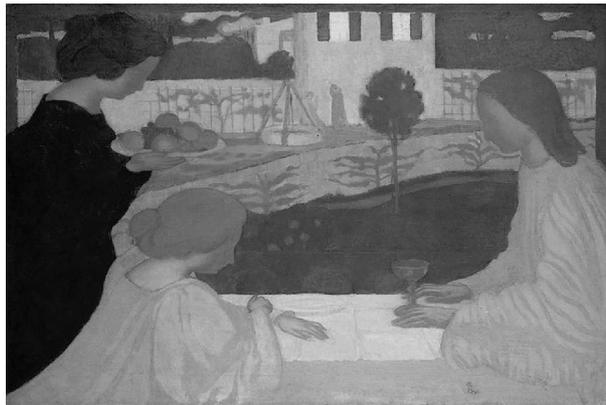


図 2: Mauris Dennis. *Martha and Mary*, 1896. The State Hermitage Museum 所蔵

が妹だと考えられてきた。マルタがイエスを迎え入れ、イエスへのもてなしを取り仕切っているらしいこと、マリアが憤ましく、あるいはしおらしくしているらしいこと、マルタがイエスに向かって発言する一方で、マリアは無言であること、こうした点などによって、そう考えられてきたと思われる。だからといってどうしてそう考えることになるのか、本当は、そのこと自体が問題をはらむ。だが、そう考えさせる通念あるいは思考傾向が長らく流通し、今も存在していることは明白であろう。この点に関して、ここでは問題を指摘するだけにしておく。

イエスがこの物語で行なっているのは言葉を伝えることである。それはもちろん神の言葉である。マリアが行なっているのは、主イエスの足もとにじっと座ってその言葉に耳を傾けることである。しかも彼女はまず確実に、聞き返しも問い返しもせず、沈黙のうちにその言葉に聞き入っている。これが、マリアの行なうただ一つのことであり、それですべてである。他方、マルタの行なっていることは、マリアのものとは大きく様子が異

なる。彼女は立ち上がり、イエスから離れ、イエスをもてなす^{*5} ために働いている。さらに加えて、マルタはイエスに言葉をもって問いかけ、一つの要求をする。そのマルタに向かって、神の子であるイエスは直接に言葉を伝える。マルタに対するイエスの言葉はテキストにはっきりと記されている。マリアに対するイエスの言葉は一つも記されていない。

2.2 二人のあり方

イエスは神の子であるが、マルタとマリアはともに、からだをもって現実に世に持っていく人間である。そういう二人のあり方(身の持し方)は、しかし以上のように大きく異なっている。それぞれのあり方について、どのように特徴づけもしくは性格づけを行なえばよいのだろうか。さらには、二人のあり方は相互にどう関係すると考えればよいのだろうか。時代によって宗派によって、この点がさまざまに考えられてきたことは言うまでもない。しかし一つの読み解き方が、一般的で主流をなすものとしてはっきり指摘できる。そしてそれは prima facie には^{*6} 妥当な解釈なのであろう。すなわちそれによると、マリアのあり方が、イエスによって義認されたのである。マリアは「無くてはならない」「ただ一つ」のもの、「善い方を選んだ」。これに対して、マルタはその「ただ一つ」のものを失っており、「いろいろなこと」にわづらっている。それゆえ、マルタはマリアよりも劣っているのである。

このような読み方は今日でもかなり一般的である。たとえば現代の注釈書でも次のように述べられている。「ルカは活動的な隣人愛に最も強くアクセントを置いてはいるけれども、やはり、静かに耳を傾けることを擁護している。イエスを迎えるにあたっては、行為することではなくて注意深く聞くことが、正しい振舞いなのである」^{*7}。「活動的な隣人愛」(die tätige Nächstenliebe)という言葉は明らかにマルタの行ないを指しているわけだが、それにアクセントが置かれているとされながらも、結局のところマルタの行ないは「正しい振舞い」(das rechte Verhalten)ではないとされている。沈黙のうちに聴き従うという正しい振舞いをするマリアに引き比べて、マルタは、現実的な生活の営みに有能ではあるかもしれないが、たんにそれだけにすぎない人間なのである。この注釈ではそこまで述べられていないが、マルタは気忙しく小賢しい女性であるとされることもある。自己中心的な、独善的な女性と解されることすらある。

こうした一般的解釈の根拠は何であろうか。どのような考え方が、こうした解釈を成立させるのだろうか。同じルカ伝の別の場面に、その一つと目されるものが記されている。その場面でイエスは弟子たちに、「何を食べようか命のことを心配したり、また何を着ようかと体のことを心配したりするな」と命じている^{*8}。「何を食べよう、何を飲もうと考えるな、また気をもむな」とも命じている^{*9}。イエスによれば、人間が「心配し」

^{*5} 冒頭に挙げた翻訳では、「御馳走」という具体性をもった訳語が用いられている。聖書のギリシア語は diakonia (名詞)そして diakoneō (動詞) という語である。ラテン語では ministrare (Latin Vulgate) 英語では serve (King James with Codes) ドイツ語では dienen (Revidierte Lutherbibel) がこれにあてられている。場面から判断して「御馳走」と訳すのは適切であり、絵画作品でも料理や御馳走の様子が描かれてきたが、必ずしもそれに限定して解する必要はない。うれしい客人を迎える際に当然行なわれる、さまざまの「もてなし」、「世話」という広がりを含めて考えるべきである。このギリシア語はのちにキリスト教会において、教会内での、あるいは教団内での「響応」を意味するようになっていったが、それをルカの時代にもちこむ必要はない。なお、聖書のテキストに関しては、CD-ROM Database である *Bible Works 4* を用いた。

^{*6} prima facie (一応のところ) というわずらわしい言い方をしたのは、テキストを「素直に読めば」とか「自然に読めば」といった言い方を避けたいからである。上田も「文意上自然な理解」と述べている [10, p.353] が、このような言い方に対しては、そしてテキストの「素直な」「自然な」理解という概念に対しては、慎重でなければならない。

^{*7} Günter Baumbach und Karl Martin Fischer(Hg.), *Das Neue Testament mit Erklärungen*. 1986 Berlin/Altenburg. S.145. これは [4, S.276] から引用した。

^{*8} ルカ 12:22. 前掲 [9] の訳文。「心配する」と訳されているのは、merimnaō = to be anxious, to care for, look out for (a thing).

^{*9} ルカ 12:29. 前掲 [9] の訳文。「考える」と訳されているのは、zēteō = to seek in order to find, to seek i.e. require, demand. また、「気をもむ」と訳されているのは、meteorizō = to rise up on high, be of a doubtful mind.

(merimnaō)、「探し求め」(zēteō)、「心がまるで空中高く宙ぶらりんにされたかのように落ち着き無く気づかう」(meteorizō)べきものは、決してマルタが行なっているような事柄ではない。人間がそのようにするべきものはたった一つ、魂が救われること、神の国のことなのである。イエスはこうも命じている。「あなた達はむしろ御国を求めよ」*¹⁰。こうしたイエスの命令がとどかない、まったく世俗的な人間がマルタであり、彼女はマリアに劣るということになる。

2.3 二人が女性であること

2.1 では問題の指摘のみにとどめた事柄をめぐって、ここで少し考えておきたい。これはエックハルトの義解には直接関係しないが、本稿の着目する「ありふれた営み」、そして「からだ」という論点には関係するからである。

イエスは男性であり、マルタとマリアはともに女性である。ここまで本稿ではこの点を取り上げてこなかった(神が父であることも)。一般的解釈でも、こうした性差が表明的に取り上げられてはいない。むしろ、これは何の問題もないこととされ、何の問題もないという前提の上に、さらに読解が積み重ねられると考える方が適切である。マルタが姉とされ、マリアが妹とされるのも、その積み重ねられた読解の一つであろう。しかし、これが自明の理でないことは明らかである。性差に着目してこの物語を読むと何があらわれてくるだろうか。そうした着眼のもとでなされた研究はすでに存在する。それを手がかりにしよう。

シェイバークによれば、「マルタにかかわる大衆文学と伝承は、姉妹を対抗させているこのよく知られた物語に多くの女性が長いあいだ不快感を抱いてきたことを証明している」[6, p.494]という。その「不快感」とはどのようなものであろうか。シェイバークは「読者が彼女(マルタ...本稿筆者補記)と自己同一化することは求められていないが、それでも多くの読者がそうするのである」と述べる[6, p.494]。マルタは、客人に対するもてなしを率先して行なっている。多くの女性が、みずからもそれを日常的に行なっているであろう。客人が男性であれば、女性がもてなしを行なうと当然とされているであろう。ところがイエスは、それを叱責しているように思われる。つまり、もてなしは女性が行なうべき事柄だとされているにもかかわらず、実際に女性がそれを行なうと、否定的に評価されるのである。ここには抑圧が重なり合っている。客人をもてなすということは、その客人を愛し尊敬するならば、迎える側の人間が当然なすべき事柄であろう。しかし、それは余計なものだとされる。これでは、もてなしの行為は女性たちに何の喜びも、充実も、もたらさない。だからといって女性がそれを放棄することは許されていない。女性たちはそれに何の意味も感じないまま、黙って行ない続けるしかない。マルタも、イエスに叱責されて沈黙したのではなからうか。「不快感」は当然である。

マルタと同じ女性であるマリアについてはどうであろうか。彼女はイエスの言葉、教えに聞き入っている。イエスに叱責されてはいない。叱責されたと思われるマルタに比べれば、これは、彼女がイエスに受け入れられていることを意味するだろう。こうした点を捉えて、「女性による神学の学び」の可能性を読み取る解釈がある。アームストロングによれば、「それまで、このような学びは男性だけのものではあった。女性は、マルタがしているようなことをするべきだと思われていたのだ。つまり、男たちが話をしている間、彼女らはそっと歩き回り、だれもが居心地よくしているかどうかを気に配っていたのである。だが、いろいろな立場を逆転させるイエスの新しい世界秩序は、女性を家庭の瑣末な家事から解放し、彼女らに男性と同等の場を与えるものであった」[1, p.30]。なるほどマリアは神の教えに聞き入っており、それを学んでいると言えよう。知識や情報から遠ざけられるのが常であった女性が、直接に神の教えに接していると言えよう。

*¹⁰ ルカ 12:31。前掲 [9] の訳文。「求めよ」と訳されているのは、zēteō である。ギリシア語原文は plēn zēteie tēn basileian autou, であり、直訳すると、「そうではなくて、父の国を探し求めよ」となる。「父」が文脈上指示しているのは神である。

しかし、シェイバークが言うように、「彼女の学びは完全に受容的な受け身のものであり、創造的な学びではない」[6, p.495]。マルタのように立ち、動き、発言する女性ではなく、マリアのように座り、動かず、無言である女性、まったく受容的である女性の方が、イエスに受け入れられ、神の教えに接することができる。父である神の言葉、神の息子であるイエスの言葉、これが向けられてふさわしいのは、そのような女性なのである。男性の教えが向けられるとき、女性は動いてはならず、言葉を発してはならない。からだを動かさず、ひたすら素直に受け入れるべきなのである。

ルカ伝では、イエスの弟子たちはしばしば発言し、イエスと対話する。全員が男性である弟子たちは、みずからも言葉を発しつつ、対話のうちで、神の教えを学んでいく。しかし、マリアは発言しない。この点で、マリアはイエスの弟子ではない。「同等の場」は決してあたえられていない。彼女には神の教えを受容することだけが許されており、それを伝えることは許されていないと思われる。そもそもマリアには、伝えることは不可能であるような身の持ち方だけが割り当てられている。マリアが妹とされマルタが姉とされるのは、男性の教えに素直に聞き入り、じっと動かずに受容するマリアが、男性にとってよりいっそう望ましいからであろう。つまり、男性にとってよりいっそう乙女であるからではないか。言うまでもなく、この「乙女」という観念は、男性的な観念である。

「女性による神学の学び」解釈は、マリアと同じ女性であるマルタをどう扱っているか。この解釈では、マルタには「瑣末な家事」が割り当てられるのみである。この瑣末なものと対比されるのは、イエスの重大かつ容易ならぬ教え、神学であろう。この序列が暗黙の内に受け入れられ、それによって、女性のあり方の一つに、神学の内に組み入れられる可能性が示唆されるが、他方で、女性の別のあり方は断罪され、消滅させられる。学びの可能性の示唆によって、女性はあり方を限定されるのであり（「乙女」）さらに巧妙なことには、女性集団の内部に亀裂がもたらされるのである。重大かつ容易ならぬ神学に組み入れられたと自認（むしろ誤認と言うべきか）する女性がもしいたとすれば、この女性は、自分のようではない女性たちをどう考えるであろうか。嫌悪する可能性すら生じるのではあるまいか。

考えるべきは次のことである。家事は瑣末であり、神学は重大である、のだろうか。この二つのあいだにはこのような序列しか可能性がないのだろうか。

3 エックハルトの義解

エックハルトはマルタとマリアの物語に対して大胆な解釈を施す。結論的なことをあらかじめ雑駁に言うのと、一般の解釈を逆転して、マルタはマリアよりも優れている、と読み解くのである^{*11}。

3.1 二人をそうさせたもの

説教の定型にしたがって、エックハルトは最初に聖書のテキストを引用する。しかしそれは全文ではなく、「マリアは主の足もとに座ってお話を聞いていた」までである。つまり、エックハルトは場面およびマルタとマリアそれぞれの「身の持ち方」が描写される部分まででいったん聖書のテキストを切り、ただちに義解をはじめめる。そしてそれを踏まえた上で、人間であるマルタの、そして神の子であるイエスの「言葉」が記された部分に進む。義解全体が大きく二段構えになっているわけである。それでは、冒頭の二段落を見よう。

^{*11} エックハルトのこの義解に対する本稿の読み方は、その基本線を上田 [10] に負う。おそらく当時この解説を執筆中であつたと思われるが、かつて京都大学文学部での講義において、私はみずからの身をもって上田からこの義解を、そして解説を聞くことができた。これを感謝する。

三つのことが、マリアをわれわれの主の足もとに座らせた。その一つめは、神の慈愛 (die Güte Gottes) が彼女の魂を包んだことであった。二つめは、大きな言い表しがたい欲求 (Verlangen) であった。彼女は何ものへとも知らずに憧れ、何ものをとも知らずに願い求めたのである。三つめは、キリストの口より流れ出た永遠の言葉から彼女が汲み取る、甘美な慰めと法悦 (der süße Trost und die Wonne) であった。

マルタもまた三つのことによって動かされた。それが彼女をあちこちと立ち働かせ、愛するキリストへのもてなしをさせたのである。その一つめは、円熟した年齢と極限にまで鍛え抜かれた根底 (ein gereiftes Alter und ein bis ins Alleräußerste durchgeübter Grund) であった。それゆえ彼女は、自分をおいて他の何人もそのように活動することはかなわないと信じたのである。二つめは、愛の命じる最高のものに向かって外的働きを正しく整えることのできる賢明な智慧 (eine weise Besonnenheit) であった。三つめは、愛する客人の気高さ (die hohe Würde des lieben Gastes) であった。^{*12}

たがいに大きく異なるマルタとマリアの振舞いが、それぞれなぜそのようであるのか、エックハルトは両者を明確に対比しながら、それぞれについて三つのことを挙げている。順に検討してみよう。

3.1.1 魂と根底

一つめとして、すなわち最も基本的なものとして、マリアについては「神の慈愛が魂を包んだこと」が挙げられる。マルタについては「円熟した年齢と極限にまで鍛え抜かれた根底」が挙げられる。マリアのあり方を決めているものは、まず、「神」であるが、マルタのあり方を決めているものは、まず、「円熟した年齢」である。「年齢」とは言うまでもなく時間的なものであり、現実はこの世界に生きていく人間についてのみ語りうる事柄である。その年齢はさらに「円熟した」と形容されている。「円熟」とは、何ものもまだもたらすことのできない状態にあるのではなく、いつでも実りを、収穫をもたらすことのできる状態にすでにあることを言う。したがって、世に対するマルタの持し方が現実の生を基点とすることが明示されているばかりか、それが何か積極的なものを、実りと呼ぶべきものを現実の外にもたらしうることも示唆されている。なお、マリアもまた、マルタと同じく現実に生き、暮らしていく人間である。それゆえ、そのあり方を決めるものがまず神であるとはいっても、それはマリアが何らかの仕方と神との関係に入った上でのことではありえない。しかしその関係は、「神の慈愛が……包んだ」ということである。マリアのあり方は徹頭徹尾、神が基点になり、神から定められている。

さらに、神の慈愛が包んだのは、マリアの「魂」である。これは、2.2 で挙げたイエスの命令を振り返れば、イエスの命令に則した状態、人間がそれを求めるべき、そうあるべき状態にマリアがあることを意味するだろう。マリアの魂は神と触れあい、神によって救われたのだと言ってもよいだろう。他方、マルタについてこれに対応して挙げられるのは、彼女の「極限にまで鍛え抜かれた根底」である。「根底」とは何であろうか。これはエックハルト思想全体の理解に関わる大きな問題であって、ここで正面から立ち入ることはできない。しかしたとえば、クヴィントはこの「根底」を「存在の根底」((Seins-)Grund) と補って訳している [7, S.280]。また、ミートは「魂の根底」((Seelen-)Grund) と補って訳している [5, S.157]。エックハルトは別の説教では、「魂はその存在を神から直接に受け取る。それゆえ、神は魂が自分自身に対するよりも魂に近い。それゆえ、神はその全神性をたずさえて、魂の根底に (im Grunde der Seele) いる」と述べる [7, S.201]。あるいはまた、

^{*12} 以下におけるエックハルトからの引用は [7] による。この引用文は同書 S.280。また、訳文は田島 [3, pp.206–224]、上田 [10] の訳文を参照しながら、私が作成した。

「魂の内なる力」について語る際に、「この力は根底にまで突き進み、さらに求め、神をその一性において、その荒野においてつかむ。この力は神を神の砂漠において、神固有の根底において (in seinem eigenen Grunde) つかむのである」とも述べている [7, S.206]。魂とは区別されるものとして「魂の根底」、あるいは、神とは区別されるものとして「神の根底」なるものをエックハルトは語るのである。エックハルト思想の鍵概念の一つである「離脱」(Abgeschiedenheit)の一端がここにあらわれている。「魂」であれ「神」であれ「存在」であれ、それがそれであるという限定を突き抜け、限定を離れているがゆえにもはや何ものとも言えない、端的な「根底」ということをエックハルトは考える。これはときには「無」(Nichts)とも言われる(上に引用した神の「砂漠」「荒野」という語を見よ)。このような「根底」という語がマルタについて用いられていることに注目しなければならない。これを次のように解することが可能だろう。マルタはそのような突き抜けを、突破を経ている。彼女は「神」「魂」「存在」といった限定へのとらわれを突破して、そこから離れており、この義解でのちにエックハルトが用いる「神なしに」(ohne Gott)という特徴的な表現が指し示すところにまで、いたっているのである。さらにもう一つ留意しなければならない。それは、彼女の根底が「極限にまで鍛え抜かれた」と形容され、なおかつ、「円熟した年齢と極限にまで鍛え抜かれた根底」という具合に、年齢とひとまとまりにして一息に言われている^{*13} ことである。すなわち、根底が人間の現実の生と結びつけて考えられているのであり、現実の生において年齢を重ね円熟にいたる道筋において鍛え抜かれ、鍛え抜く道筋において円熟にいたるといふ一体のものとして、考えられているのである。マルタの「根底」は、重層的にとらえられるべきものである。それはまずは、現実の生においてもなしのために忙しく立ち働く彼女の、世に対する持し方の源である。しかしその立ち働きは、決して現実の生に埋没してしまうことを意味するのではない。確かにそれは神から離れていることを一面では意味するが、同時に他面では、神をも突破してとらわれなく振舞えることをも意味する。マルタの「根底」は、神とのつながりを否定的にそのうちに含んでいるのである。

3.1.2 不知と智慧

二つめとして挙げられるのは、マリアについては「大きな言い表しがたい欲求」、マルタについては「賢明な智慧」である。ここでは不知と知とが対比されている。マリアは「言い表しがたい」(マリアはこの物語において終始無言である)欲求に満たされ、「何ものへとも知らずに」(ohne zu wissen, wonach) 憧れ、「何ものをも知らずに」(ohne zu wissen, was) 願い求めている。マリアには知が欠如していることがはっきり語られている。もちろん、憧れに満たされたこのようなマリアのあり方は、彼女が神へと引き上げられ、吸い寄せられて、神との合一にいたる事態をあらわしている。したがって、それ自体としては、必ずしも否定的にとらえられるべきものではない。けれども、そこには不知という否定的側面が確かに存する。

これに対して、マルタには「賢明な智慧」がある。この言葉遣いからして、それは決して小賢しいものではない。イエスのために食材を按配し、食卓を整える、食材を調理して、できあがった料理を給仕する。具体的にはもてなしのこうした個々の行ないが、「外的働き」である。エックハルトによれば、そうした働きは「正しく」整えられているのであり、その場かぎりのおざなりな仕方ではなされているのではない。この正しさは、「最高のもの」が視野におさめられていることから帰結する。「最高のもの」との連関を見失わず、その連関に即することを知り、なおかつ個々の具体的な場面をよくわきまえて連関に応じるがゆえに、正しいと形容できるのであり、「賢明な智慧」と言いうるのである。

^{*13} エックハルトは三つのことの一つめとして Das eine war Alter und Grund. と語っている。この und すなわち「と」を、二つの事柄のたんなる並列と解するのは不適切である。

ここでエックハルトは「外的」という語を用いており、これによって、さらに新たな仕方での二人のあり方の対比がなされている。マルタの智慧は外的に働き出ており、マルタは立って動いているのに対して、マリアの不知は「内的」にみずからの内に、すなわち憧れや願い求めのうちに沈潜する。マリアは座ってじっとしているのである。このような「外的働き」をさらに立ち入って考察することはあとに譲るが、イエスが「気をもむな」と命じた、食べることや飲むことに関係しているマルタの行ないが、ここではすでに積極的な捉え方をされているのは明らかであろう。この外的働きは「瑣末」ではない。

3.1.3 必要と授与

三つめとして挙げられるのは、マリアについては「甘美な慰めと法悦」、マルタについては「愛する客人の気高さ」である。マリアについて言われる甘美な慰めと法悦は、彼女の憧れと願い求めに呼応して、彼女にもたらされたものである。彼女はそれを「永遠の言葉」から汲み取った。したがって、マリアには、イエスの口から流れ出た永遠の言葉を受容するための器と言うべきものはあったことになる。つまり、受容できるだけの体勢、受動ということがそもそも成立しうるだけの構えは、マリアにはあった。おそらくこのことも、一般にマリアがマルタよりも優れたあり方だとされることに関係する。マリアは座っており、座るという仕方、受動ということを成立させている。確かに、永遠の言葉を受容ということ自体を成立させる構えが、あらかじめなければならないと言えよう。一般的解釈では、マリアにはそれがあつたが、立ち働くマルタにはそれすらもなかったと考えられているのであろう。マルタは神には無縁の人ということにもなるだろうか。しかし、エックハルトが対比して挙げるのは、「愛する客人の気高さ」である。一般的解釈とは対比の仕方が異なると思われる。これはどういう対比なのか。

甘美な慰めと法悦は、マリアが得たものであり、マリアにおいてあるものである。マリアは憧れおよび願い求めと引替えに、みずからの必要と引替えにそれを手に入れた。それによってマリアの必要は満たされた。また、上に指摘した、受動を成立させる器とでも言うべきものも、そのあり場所はマリアである。エックハルトはマリアについては、マリアにおいてあるものだけを語っている。これに対してマルタについて述べられるのは、「客人」すなわち他者の「気高さ」である。マルタにおいてある何かは指摘されてはいない。また、彼女は何かを引替えに得たりもしていない。彼女はただ相手のゆえに立ち働くのみである。自分の側にある必要のゆえにでなく、その必要と引替えに何かを得るのでもなく、ただ気高い愛する他者のゆえに、立ち働き、もてなしたのである。マルタはそういう意味で、自分自身というものから離れている。「マリアにおいてある」ということを内的と言ってよいだろう。したがって、マルタについてはここでも「外的」ということが指摘できる。マルタには必要ということと、それが満たされるということが語られていない。そういう意味で、マルタには欠けているところがないと言うこともできるだろう。大胆を承知で言うならば、マルタは、何かを求め、手に入れて、みずからの内に取り込む人ではなく、外にあたえる人なのである。

3.2 マルタの言葉

以上、ルカ伝テキストの前半部分に対するエックハルトの義解から、主要部を取り上げて検討した。次にエックハルトは、マルタの言葉とイエスの言葉が記された部分に進む。マルタの言葉は以下の通りであった。

「主よ、姉妹がわたしだけに御馳走のことをさせているのを、黙って御覧になっているのですか。手伝うように言いつけてください。」

一般的な読み方では、これはマルタの不満のあらわれであり、マルタの増長のあらわれであるとすら解される。エックハルトはどう述べるであろうか。

3.2.1 生きること

マルタの言葉に対する義解は次のようにはじまる。

さて、マルタは言う。「主よ、彼女に私の手伝いをするよう言ってやってください」。マルタは憤慨してこう話したのではない。むしろそれは愛情あふれる好意から出た言葉であり、この好意のゆえに彼女はどうしてもそう話さざるをえなかったのである。われわれはこの言葉を愛情あふれる好意、愛の叱責 (eine liebenswürdige Nekkerei) と呼ばなければならない。どうしてそうなのだろうか。よく注意して聞いて欲しい。マルタは、マリアが歓喜に浸りきって魂がすっかり満足してしまっているのを見て取ったのである。マルタは、マリアがマルタを知るよりも、マリアをよく知っていた。なぜなら、彼女は長くそしてよく生きてきた (lang und wohl gelebt)^{*14} からである。というのも、生きること (das Leben) は最も高貴な認識 (die edelste Erkenntnis) を贈ってくれるからである。生きることは、喜びや光よりもよりよく認識するのであり、人が神のもとなるこの生において獲得できるすべてのものを認識するのである^{*15}。ある意味で、生きることは、永遠の光があたえうるよりもいっそう明らかに認識させてくれる。永遠の光は常にわれわれ自身と神とを認識させるが、われわれ自身を神なしに (ohne Gott) 認識させてはくれない。自分自身だけを見る方が、等不等の区別をより鋭く見て取れるのである [7, S.281]。

エックハルトはマルタの言葉を「愛の叱責」だとする。この場合の愛とは、ともに暮らすマリアに対する愛情である。マルタの台詞は、その愛情のあるがゆえにやむにやまれず出た言葉、つまり、何か腹づもりがあったり計算が働いたりしたのではなく、思わず口が開いて声となった言葉だということである。ここにも、マルタが外に向かって働き出る人間であることが示唆されていると言ってよいだろう。マルタのからだにおける一つの突破をも見て取ってよいかもしれない。

「どうしてそうなのだろうか。よく注意して聞いて欲しい」と注意を喚起したあと、エックハルトはたたみかけるように言葉を重ねていく。マルタは、マリアが歓喜法悦に浸り、満足し切っているのを見て取った。歓喜法悦も満足も、それ自体としてはむしろ肯定的に評しうる事柄である。ましてマリアの場合、神の子であるイエスの教えによってもたらされた歓喜法悦が、彼女の魂をあますところなく満たしたのである。しかし、マルタはまさにそこに、マリアが面している問題を見て取った。それはどういう問題なのか、そして、どうして

^{*14} 「長くそしてよく」はクヴィントの校訂では lange und recht [7, S.281] だが、ここでは上田 [10, p.357] にしたがって lang und wohl と読む。中高ドイツ語の原テキストでは lange und wol。

^{*15} この一文にはテキスト校訂に難しい問題がある。クヴィントは、Das Leben läßt Lust und Licht besser erkennen als alles, was man in diesem Leben unterhalb Gottes erlangen kann, としている [7, S.281]。ミートは、denn Leben erkennt besser als Lust oder Licht. Alles, was man in diesem Leibe, abgesehen von Gott, erfahren kann, としている [5, S.158]。さらに、ピュトナーの校訂 (Meister Eckeharts Schriften und Predigten Aus dem Mittelhochdeutschen übersetzt und hg. von Hermann Büttner, Jena 1917) は [4] で採用されているものだが、そこでは、Leben lehrt Hochgefühle und Erleuchtungen besser einschätzen, als alles, was — Gott immer ausgenommen — uns in diesem Leibe irgend beschieden sein mag. となっている。田島はミートの解釈と訳にしたがって、この箇所を「生きるということは歓喜や光よりもよりよく認識するものである。生きるということは、この身体で経験できるすべてのもの、ただし神は除くが、そのすべてを真に与えてくれるのである。」と訳している [3, p.208]。上田は、「生は歓喜や光よりもよりよく認識する。ある意味では、永遠の光が与え得るよりも一層明らかに認識する」 [10, p.359] と訳していて、後半部分が訳出されていない。

こうしたテキスト上の相違、とりわけ「この人生で」という文言と「この身体で」という文言の相違は興味深く、問題として大きい。本稿では立ち入らない。

マルタにはその問題を見て取ることができたのか。エックハルトはまず後者について述べる。

「マルタは、マリアがマルタを知るよりも、マリアをよく知っていた。なぜなら、彼女は長くそしてよく生きてきたからである。というのも、生きることは最も高貴な認識を贈ってくれるからである」。ここではじめて、これまでは対比が表立っていた二人のあり方、二人の世に対する持し方が、相互にどういう関係にあるのかが示される。最初の文については、上田が明解に読み解いている。「マルタとマリアは姉妹として親しみのうちで相互によく知り合っているはずである。然し、主体の境地に関してはおのずから高低があらざるを得ない。而もそれは、自らが超え出はじめてより高い境地が真に知られ、従って高低の差も如実に知られるという構造においてである。低い境地に即して言えば、それは低さではなくその都度の高さである。より高いところが見えないというそのことが低さに属している」[10, p.358]。エックハルトはマルタの方を、より高みにある、より十分な、より義しいあり方とするのである。

そしてマルタのそのあり方は、彼女が「長くそしてよく生きてきた」ことによると言われる。この言葉は、3.1.1で考察した「円熟した年齢と鍛え抜かれた根底」という言葉と結びつけて考えなければならない。「長く」(lang)は、たんに時間的な長さを意味するだけではない。現実の生を生きるということは、ある一つの時点をとってさえすでに、出現している多種多様な問題に直面するということであり、さらに、そういう瞬間が絶え間なく続くということ、多種多様な問題の一つが終われば、ただちにまた別の多種多様な問題が出現してくるということである。多様な諸問題の連鎖としての現実の生を、マルタは「円熟した年齢」と言われるまでに「長く」生きてきた。キリストのもてなしのために今立ち働いている彼女の背後には、現実の生におけるさまざまな問題を知る、多彩な経歴がある。「よく」(wohl)は、言葉自体の成り立ちからしても、道徳的倫理的な意味に限定して考えてはならない。それは「十分に、しっかりと、適切に」ということである。マルタは現実の生におけるその都度の問題にしっかりと向き合い、適切に分別し、充分に対処してきた。そこには当然ながら、うまくいくこともいかないこともあっただろうが、彼女は失敗にも成功にもしっかりと向き合ってきたであろう。キリストのもてなしのために今立ち働いている彼女の背後には、しかるべく、まっとうに、現実の生を処してきた、世に持ってきたという、充実した経歴、「鍛え抜かれた」強靱な経歴がある。さらに、「長くそしてよく」と一息で言われている。長ければよくなるわけではなく、必ず充実がもたらされるわけではない。長いけれど空疎な人生というものはありうる。充実のためには長くなければならないのでもない。短いけれど充実した人生というものもありうる。立ち働くマルタの背後には、多様な事柄とそれに処することとをこれまで学び知ってきた、そして実際にその知によって処してきた、力にあふれる豊穡な経歴があるのである。

そしてその経歴すなわち「生きてきた」ということが、「根底」と結びついている。現実の生が、エックハルトの言う「根底」、マリアのような仕方での神との合一をも突破したところと結びついているのである。この結びつきをエックハルトは、「生きることは最も高貴な認識を贈ってくれる」という言葉で示している。上田も指摘する通り[10, pp.358-59]、「高貴な」(edel)という形容詞は、エックハルトにおいては魂の神性に対して用いられる特別な語彙である。その言葉が最高級形で「認識」について用いられ、さらに「生きること」がその「最も高貴な認識」をもたらすと言われている点に注目しなければならない。「生きること」とは、さしあたりはマルタのように生きることであるが、もちろんマルタのみに限定される特異的なものではない。それは人間の現実の生と解すべきであり、したがって、マリアは今ほそこまでいたっていないが、そこにいたる可能性はマリアにも、誰にでもであると解すべきである。

人間の現実の生によって贈られる最も高貴な認識とはどのようなものであろうか。注15に述べたとおりテキストに問題があるのだが、語彙として現に用いられている「歓び」とは、マリアが浸っているような神との合一による歓喜法悦を指すと考えられる。そして「光」とは、歓喜法悦を脱して神を知的に認識する場合の知性的観照を指すと考えられる。この両者がもたらすよりもよい認識、あるいは、この両者を対象とする認識より

もよい認識が、生きることによってもたらされる。つまり、最も高貴な認識とは、一切を等しいものと見る無差別の認識に勝り、なおかつ、一切を区別し分類する差別相の認識に勝る認識であろう。ここで勝るといのは、一方の認識様式に尽くされないということ、一方の認識様式に固着せず、そこから離れつつもそれを含んでいるという意味であろう。

この点は「永遠の光があたえうるよりもいっそう明らかに認識させてくれる」という言葉によって明確に示されている。永遠の光とは神の光にほかならない。それは「われわれ自身と神とを認識させる」が、その認識は神と自己とを神において、神の光において無差別に、平等に認識させるということである。「いっそう明らかに」とはそうした無差別平等ではなく、等不等を知り、個々具体の相違を知ることである。そこにまていたるためには、「神なしに」ということがなければならない。注意すべきは、ここで言われる「神なし」の認識が、すでにたんなる分別知ではないこと、いまだ神を知らないたんなる世俗の知ではないことである。永遠の光に満たされたあり方を経て、永遠の光をみずからの内におさめたような仕方で、からだをそなえて個々具体的に則さなければならない現実の生に出ていく、そういう認識なのである。マルタはそういう認識をよくなしえているのである。

3.2.2 立ち上がること

そのようなマルタによって見て取られた、マリアの問題とはどういうものであったのか。エックハルトはマルタの言葉の真意は次のようなものであったとして、これに答える。

それはあたかもこう言おうとしたかのようにであった。「私の姉妹は、あなたのもとに座って慰めに満たされているかぎり、もうすっかり自分の欲することは何でもできるかのように思い込んでいます。そういうものであるかどうか、今こそ彼女に分からせてやってください。そして彼女に、立ち上がって、あなたから去るように言ってください (*heiß sie aufstehen und von dir gehen!*)」。さらに、たとえマルタがそういう意味で言ったのではなかったにしても、それは愛情のこもった言葉であった。マリアは何ものへとも知らずに憧れ、何ものをも知らずに願い求めるほどに、欲求に満たされていた。われわれは、愛すべきマリアがそこに座っていたのは、靈的獲得のためよりも、幸福感のためではなかったかと疑いを抱くほどである。それゆえにマルタは「主よ、彼女に立ち上がるよう言ってください」と言ったのである。マルタは、マリアがこの幸福感のうちにとどまったまま、先に進まなくなることを恐れたのである [7, S.281]。

マリアが歡喜法悦に浸ってそこにとどまり、先に進まなくなること、それにもかかわらず、マリアが自分にはもう何でもできるかのように思い込んでいること、これをマルタは見抜き、心配したのである。「立ち上がって、あなたから去る」という言葉は、「神なしに」と同じことを指し示している。

さらに、マルタについて「立ち上がる」という言葉が用いられていること自体に注目しなければならない。なぜなら、聖書の多くの箇所、イエスがこの言葉を発しているからである。イエスはたとえば中風患者に対して「起きて歩け」^{*16}、と命じ、ヤイロの死んだ娘に対して「少女よ、おまえに言う、立ちなさい」^{*17}と命じている。いわゆる治療の奇跡の場面で、イエスは何度もこの言葉を口にしている。治療の場面のみならず、弟子たちに対しても、ゲッセマネで「立て」と命じている。「立ち上がる」という言葉は、神の子であるイエス

*16 マタイ 9:5。

*17 マルコ 5:21-43。

が人間に対してしばしば用いる重要な語彙なのである。そして「立ち上がる」という言葉が指し示す事態は、イエスが人間に対してしばしば命じる事態、人間に求められる姿勢なのである。エックハルトは「それゆえにマルタは『主よ、彼女に立ち上がるよう教えてください』と言ったのである」と述べて、この言葉をはっきりとマルタに帰している。マルタはイエスと同じ言葉を用いている。マルタが神の教えをすでにそなえていること、永遠の光をみずからの内にそなえていることが示されている。

3.3 イエスの言葉

さて、マルタの言葉に対するイエスの返答はこうであった。

「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を配り、心をつかっているが、無くてはならないものはただ一つである。マリアは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

イエスのこの言葉は、多くの場合、マルタに向けられた叱責と解される。「マルタ、マルタ」という繰り返しには、イエスの苛立ちがあらわれているようにも思われる。エックハルトはこれをどう読み解くであろうか。

3.3.1 祝福

エックハルトによると、イエスはマルタを叱責したのではない。

するとキリストは彼女に答えて言った。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに気を配り、心を遣っている (du bist besorgt, du bist bekümmert um vieles)。必要なことはただ一つだけである (Eines ist not!)。マリアは最善のもの (den besten Teil) を選んだ。それを取り上げてはならない」と。キリストはこの言葉をとがめ立てするような口調でマルタに向かって言ったのではなく、むしろ彼女に答えて、マリアは彼女が望んでいるようになるだろうと慰めをあたえたのである [7, S.282] *18。

イエスの言葉はマルタに対する慰めの言葉なのである。イエスが人間に求めるあり方であり、マルタがマリアに求めるあり方でもある「立ち上がる」こと、これをマリアは、今はみずからのものとしていない。彼女には今はまだそれはできない。しかし、きっとマリアは「立ち上がる」ことができるようになる。マルタよ、今は待て、しかし、安んじて待てばよい。こうイエスはマルタを慰めたというのである。マルタはこのような仕方て神に祝福されたわけである。

そのように祝福されるマルタのあり方はどういうものであるのか。これについてはこれまでも述べられてきたが、このあとエックハルトは聖書の文言自体にもとづいて、義解全体を通じて最も際だった仕方で、大胆な思想を展開する。

*18 ここでエックハルトは「最善のもの」と言っており、「善い方」(ルター訳だと das gute Teil)とは言っていない。これは聖書のテキストとは異なる。エックハルトがみずからの義解を貫こうとする意志を感じ取ってよいかもしれない。あるいは伝承テキストの問題かもしれない。現時点ではこれを論じた文献を知らない。

3.3.2 名を呼ぶこと

聖書のテキストでは、マルタは、イエスによって「マルタ、マルタ」とその名を呼ばれている。現実の生をおくる一人の人間の名前が、二度、イエスの口から語られている*¹⁹。エックハルトは「ところで、キリストはなぜ『マルタ、マルタ』と二度までも彼女の名を呼んだのであろうか」と問いかけ、まず、イエスに名を呼ばれるということはそもそも何を意味するのかを明らかにする。

その名をもってキリストに呼ばれることは、キリストに永遠に知られることである。つまりすべての被造物が創造される以前から、永遠に変わることなく、父・子・聖霊の生命の書に書き記されているということなのである。……（中略）……愛するキリストが人間としてのその口によって、永遠の言葉から（すなわち永遠の書から、彼自身から）その名を呼んだ人間のうちで、失われた者はかつていなかったし、これからもいないであろう [7, S.282]。

キリストに「マルタ」と名を呼ばれている以上、彼女は義しき人として神に祝福されている。永遠に祝福されている。あるいは、マルタは永遠である。きわめて明確に、ここでそう示されている。キリストに名を呼ばれるという事態に関するこうした見方は、決してエックハルトに特異な読み方ではない。キリスト教の伝統においてむしろ正統な考え方に属するとしてよい。ここに引用はしないが、エックハルト自身、教父イシドルスを引き合いに出している。マルタは、マリアがいまだ到達していないところに（ただし彼女もきつと到達するであろうとイエスが安んじたところに）、すでに到達している。その到達したところとは、さしあたり、永遠性である。しかし、たんに永遠性と言っただけでは、まだ充分ではない。なぜなら、現実の生をおくる一人の人間であるマルタが、「マルタ」という現実の生におけるその名前そのまま、永遠なのだからである。ここに、マルタのあり方の根本的な特徴がある。

エックハルトは次にこれを明確に解き明かす。その手がかりは、聖書においてマルタの名が、イエスによってたんに呼ばれているのみならず、二度、呼ばれていることである。マルタのあり方はついにその十全な姿をあらわしはじめる。

それではなぜキリストはマルタの名を二度呼んだのであろうか。それによってキリストが暗に示したのは、マルタが、時間的善と永遠なる善のすべてを、つまり一つの被造物が所有できる一切のものを、ことごとくそなえていたということである。キリストが語った最初の「マルタ」により、キリストは時間的働きの内にある彼女の完全性を示したのである。キリストが二度目に「マルタ」と言ったとき、キリストはそのことによって、永遠なる浄福のために必要なもののうちで、彼女に欠けているものは何一つとしてないことを示したのである [7, S.282]。

マルタは、永遠の浄福への完全性、時間のうちでの働きの完全性、この両方をそなえている。彼女は完全性を二重にそなえているのである。

*¹⁹ シェイバークもこの点に着目してこう述べている。「ここで最も重要なのは、『マルタ、マルタ……』という繰り返しのなかに、愛情と配慮、そしておそらくは憤慨の調子を取り取ることである。これは『愛の家父長制』のやさしそうな声である。しかし、この箇所が促しているように『主の御言葉』に耳を傾けるならば、自らの経験と他の女性たちの経験において、テキストの背後に女性のリーダーシップと和解を奨励するもう一つの声を聞くであろう」 [6, p.496]。この主張が同書で十分に展開されているわけではなく、エックハルトとはそもそも読解の行なわれる場面がまったく異なっているのだが、「愛情と配慮」を取り取ることが重要だという指摘は興味深い。

時間的な善や完全性と永遠の善や完全性については、えてして、後者に比較すれば前者は無意味であるという関係づけが行なわれる。また、時間的ということと完全ということとは、そもそも両立しないとする考え方もある。この二つのような見方からすれば、たとえマルタが時間的意味での完全性をそなえていようと、それに積極的な意味はない。むしろ、消極的否定的に捉えられもしよう。しかし、エックハルトはここで、二つの完全性をそなえるということを語っており、それが「一つの被造物が所有できる一切のもの」だとしている。したがって、永遠の善や完全性だけでは、「一つの被造物」すなわちここでは人間が「所有できる一切のもの」には何かが足りないということになる。そして、時間的な善や完全性は、永遠の善や完全性にその何かをさらに付け加えるものであることになる。それは何であろうか。上に引用した部分に続くテキストを見よう。

3.3.3 かたわらに立つ

だからこそ (Darum) キリストは、「あなたは気を配り心を遣っている」と言ったのであり、それは、「あなたは多くの事物のかたわらに立っているが、決してそれらの事物があなたのうちにあるのではない」(Du stehst bei den Dingen, nicht aber stehen die Dinge in dir.) という意味であった。気を配っている人とは、そのすべての生業 (Gewerbe) において少しも妨げられることのない人を言う。妨げられることのない人は、永遠なる光を模範としてそのすべてのわざ (Werke) を秩序正しく果たしていくのである。このような人たちは事物のかたわらに立っているのであって、決して事物の中に立っているのではない (solche Leute stehen bei den Dingen und nicht in den Dingen.) [7, S.282–83]。

「だからこそ」という接続詞が重要である。二重に完全であるからこそ、諸事に気を配り、心を遣いうる、と言われているのである。したがって、どちらかの完全性だけでは、それはできない。もし不完全であれば、言うまでもなく、諸事に気を配り、心を遣うことはできない。気を配り、心を遣うのは、不完全だからではない。仮にマリアのようなあり方であれば、気を配り心を遣うことはできない。なるほどマリアはマリアなりに、神の教えに、みずからの魂の救いに心を遣っていると言うこともできるだろう。しかし、マリアには、その彼女なりの心遣いの対象がすでにあたえられており、彼女なりの心遣いはすでに果たされている。マリアにはもはや心遣いがないのである。

それにしても、二重に完全性をそなえるとはどういうことなのであろうか。3.3.2 で指摘した、「マルタ」という現実の生における名のままで永遠である、ということがこれを説明してくれる。すなわち、二重とは言っても、たんに横並びに、あるいは上下に重なっているのではない。エックハルトがここで考えているのは「現実的な永遠性」だと言う以外にない。通常、永遠性とは、時間を超えたものもしくは非時間的なものと考えられる。しかしここでエックハルトは、時間的な永遠性、時間において現実化した永遠性をマルタに見取っている。もちろんこれは、3.2 を通じて何度か示唆したように、マルタがすでに神の教えをそなえていること、彼女が永遠の光をみずからの内におさめていることを前提する。時間を離れ去って永遠性へという動きが成就された上で、それを前提にして、永遠性をそなえつつ時間の内に帰ってくるということである。永遠の光が時間の内に現実化するという動的な事態が、ここで言われる二重性である。無差別平等の一が、その無差別平等という性格を失うことなく、具体であり区別であり多である時間の内に、現実化するのである。

「だからこそ」、諸事に気を配り、心遣いをなす。気配り、心遣いとは「多くの事物のかたわらに立つ」が、それら事物がみずからの「内にあるのではない」ということであり、また、みずからがそれら「事物の中に立っているのではない」ということである。すなわち、事物がマルタの内に入り込み、彼女を取り押さえてしまうのではない。また、彼女が事物の内に引き込まれ、事物の中に入り込んで囚われてしまうのではない。

マルタはこのような仕方でも物と一つになることがない。というのも、彼女は本質的な一をそなえているからである。これをそなえて現実に生きるからこそ、彼女は、多・異・他を、まさにそれとして、わきまえることができる。彼女は事物の「かたわら」に「立つ」のであり、事物から離れうるのである。離れるということがまったくなければ、どうして多・異・他を知りえようか。エックハルトは義解の別の箇所 [7, S.285] では「愛すべきマルタ、そして、すべての神の友たちも彼女とともに、『気配りの中』(in der Sorge)ではなく『気配りのかたわら』(bei der Sorge)に立つ」とも述べる。気配りそのものに対しても、離れ、かたわらに立つと言われるのである。

それほどに「妨げられない人」がマルタである。あるいはこれが、マルタを範型としてすべての人間にも可能なあり方、一つの被造物が所有できる一切のものをことごとくそなえたあり方である。この人は、日毎に、次々と、生活の中であらわれてくる事物や事柄に当たり前のように向かい、それにたずさわる。「生業」とはそうにして営まれるものであり、人間のさまざまの「わざ」もそのように当たり前のように行なわれるものである。「ある人々は、わざから解放されるようになりたいと思っている。私はあえて言うが、そのようなことはありえない」(Nun wollen gewisse Leute es gar so weit bringen, daß sie der Werke ledig werden. Ich sage: Das kann nicht sein!) [7, S.288-89]。しかもこの人は、そうした事物や事柄にとらわれることがない。それに没入して失われることがない。事物や事柄の近くに、かたわらにありつつも、永遠の光にあってそれらから離れている。「この人の『光』はこの人の『生業』であり、なおかつ、この人の『生業』はこの人の『光』である (sein “Licht” ist sein “Gewerbe”, und sein “Gewerbe” ist sein “Licht”).」愛するマルタはまさにそのように立っていたのである」 [7, S.283]。「光」と「生業」とがたんに一つになっているのではない。二つのものが二つのものとして離れつつ、なおかつ一つなのである。

一つの被造物が所有できる一切のものをそなえた、現実の世に持する人間とは、エックハルトによると以上のような人間である。マルタが行なっているのは、客人を迎えて当然行なわれるもてなしであり、家事である。ほかならぬその営みにおいて、二重の完全性が、現実化する永遠性が見取られている。家事は「瑣末」ではなく、ありふれた日常の営みは瑣末ではない。この命題はこう言っただけではまだ十分な仕方でも述べられてはいない。しかし少なくとも、瑣末というような語彙を帰して何の疑問も生じないこと、そのことの由来はいかなるものかに関して、無反省であってはならないだろう。

3.3.4 現実的人間のわざ

さて、現実の生を生きるそうした人間の「わざ」(Werk)がそなえるべき徴表として、エックハルトは三つのことを挙げる。

われわれのわざ (Werke) においては、三つの点が特に不可欠である。すなわち、秩序立って、洞察豊かに、思慮深く働くということ (daß man wirke ordentlich und einsichtsvoll und besonnen) である。最も高きものにあらゆる点で対応していること、これを私は「秩序立って」と言う。そのときとしてはそれ以上善きことが考えられないようなことを行なう、これを私は「洞察豊か」と言う。最後に、善きわざにおいて生き生きとした真理が喜ばしく現前しているのを感知するとき、これを私は「思慮深く」と言う [7, S.285]。

ここに挙げられた三つの徴表は、3.1 および 3.1.2 で取り上げた「愛の命じる最高のものに向かって外的働きを正しく整えることのできる賢明な智慧」と内容的に重なり合う部分が多い。ここではしかしエックハルトにしたがって、順に検討しよう。

われわれが日々面し携わっていく多様な事柄のあいだには、相互に軽重緩急の相違がある。さらに、その中から一つの事柄を取り上げても、内部的な分節があり、構造がある。そしてそれら構造契機相互にも軽重緩急の相違がある。そうした相違を的確にわきまえなければ、たった一つの事柄でさえ十分に成就することはできない。しかもこの場合、そうしたわきまえの原点とも言うべきものが重要である。エックハルトがここで「最も高きもの」と述べているのは、3.3 では「光」と呼ばれていたものである。それに向かって、それとの関係で、事柄における、そして事柄相互における軽重緩急を秩序づけること——「われわれのわざ」は極めて知的な営みである。

こうした知的側面とともに、「われわれのわざ」には価値的選択もしくは決断の側面がある。たとえ軽重緩急が秩序のもとに見極められていても、われわれが置かれる現実のその都度の場面では、たとえば最も重大で最も急を要する事柄に、必ず着手できるとはかぎらない。だからといって、闇雲にともかく手近にあることから着手するのは不適切である。「そのときとしては」(zur Zeit)何をなすべきなのか、何をなすことができるのか、さらに、「そのときとしては」自分に何がなしうるのか、現実具体の状況において、現実のみずからの技量において、最も善いものを見抜き、選び取って、なしとげなければならない。「われわれのわざ」は決まり切った手続きではない。

最後に、感性的側面、もしくは現象学の用語で言う気分(Stimmung)の側面がある。上述二側面をあいそなえた「善きわざ」において、われわれは真理の現前を「感知」し、真理を味わい楽しむ。これは、「思慮深く」と日本語に訳してしまうとかえって分かりにくいかもしれない。besonnen というドイツ語が *sinnen* を含むことに留意しなければならない^{*20}。善きわざを行ないはじめ、行ない終わる、それを一つの道筋とするならば、その道筋を歩み抜くなかで、われわれにはさまざまなことが告知知らされる。それをわれわれは身をもって受け止め、楽しむことができるのである。「われわれのわざ」に浸透する気分は楽しみや喜びであり、そこに倦怠や退屈はない。

3.4 無くてはならない一つのもの

イエスの言葉の前半部分、「マルタ、マルタ、あなたはいろいろなことに気を配り、心をつかっている(が)」までに対するエックハルトの義解を見てきた。1 で述べた本稿の観点から見て取り押さえておくべき事柄は、ここまでで出尽くしたと言ってよい。しかし義解そのものはまだ終わっておらず、マルタとマリアの物語もまだ終わってはいない。「無くてはならないものはただ一つである。マリアは善い方を選んだ。それを取り上げてはならない」というイエスの言葉と、それに対するエックハルトの義解が残っている。簡単に最後まで追跡しておくのが適切だろう。

エックハルトはまず、一つ前の文言に立ち返って、こう述べる。「ところでキリストはこう述べている。『あなたはいろいろなことについて思い煩っている。一つのことについてではなく』」(Nun sagt Christus: Du bist betrübt um vieles, nicht um Eines.) [7, S.286]。「一つのことについてではなく」という語句をエックハルトは補う。この付加によって、すでに検討されたマルタのあり方が再確認されている。すなわち、マルタは「一」に関しては、すでに堅固なのである。そうであるからこそ、マルタは「多」について思い煩いうる。「マルタは... (中略) ...円熟した堅固な徳と氣遣いとらわれない心のうちに立っており、一切の事物に妨げられな

^{*20} 「思慮深く」という日本語に相当する部分に対し、クヴィントは本文のように *besonnen* という語をあてているが、ミートは *nach Weisheit* という語句をあてている。しかし同時にミートは、「中世的な *Weisheit* とは真理を『味わう』(Schmecken) 術のことである」と注釈している [5, S.164-65]。また、ピュートナーは *mit Bewußtsein* としているが、これは採れない。近代的な響きが強すぎる。

い。それゆえにマルタは、マリアがまだあるべき本質的な状態にないのを見て取って、彼女が自分と同じ立場に移されることを願ったのである」[7, S.286]。マルタのこの願いに応じて、「必要なことはただ一つだけである」(Eines ist not!)とイエスは答えた。すなわち、イエスのこの言葉は、誰よりもまずマリアに関して言われたのである。今のマリアにとって、「必要なことはただ一つだけである」。マリアは今のマリアとして、「最善のもの」を選んだ。それがマリアから失われることはない。

簡明を期するために、以下のように噛み砕いてよいであろう。

マルタよ、あなたは「多」にかかわっており、「一」にかかわってはいない。それは、あなたが「一」をすでに成就し、「一」においてすでに堅固だからである。マリアは、まだあなたのいるところにまでいたっていない。けれどもマリアはマリアとして、必要な唯一のものを選んだのである。マルタよ、マリアのその選びはあなたから見れば、低く、いたらないものかもしれない。けれどもマリアは、今のマリアのあり方からすれば最善のものを選んだのである。この最善のものがマリアから失われることはない。やがてマリアも「一」を成就し、「一」において堅固となるときがくるであろう。そうすれば、マリアもまたあなたのように、立ち働くことができるようになる。

4 Vita Activa

エックハルトはその生涯の終りに異端審問を受けた。死後、異端の宣告が下り、著作の写本や説教の聞き書きはすべて禁止される。キリスト教の伝統の表舞台から、彼は姿を消してしまう。しかし、聞き書きも著作も、たとえば修道院図書館の奥深くに密かに保存され、現代にまで伝えられてきた。いわゆる平信徒のあいだにも、彼にまつわる伝説が受け継がれてきた^{*21}。そのようにして伝えられてきた理由の一端は、本稿の扱った説教のテキストからも十分うかがい知られるだろう。キリスト教の伝統の内部で、あくまでも聖書の言葉そのものから、きわめて自由なアプローチと慧眼によって、注目すべき思想を抉り出し、展開している。本稿は1に述べた通り、現実の生をおくる人間が行なう、日常的でありふれた営みに視点を定めている。そういう営みをよくなしうるといふこと、これが人間においてもちうる意義が明らかにされていた。

われわれは Vita Contemplativa と Vita Activa という対概念をもっている。この対概念を用いて述べれば、エックハルトは明らかに後者の方に、より優れたあり方を看取していた。しかもそれは二重の完全性という仕方で見取されていたのであり、後者は前者を内包して具体的現実に関与するものだった。現実化した永遠性であった(3.3)。このことは、Vita Contemplativa と Vita Activa との統一、とさしあたり言語化できるが、われわれはその統一の動的状態に注目しなければならない。「神なしに」(ohne Gott)というあの特徴的な言葉遣いは、一見したところ異端的である。けれども、その射程の長さや展開の広さにこそ目を向けなければならない。また、Vita Activa がより優れたあり方であるといっても、それが日常的なありふれた営み、もてなしという営みであったことにも注意を向けなければならない。耳目を聳動するような活動が、特殊な活動が、語られていたのではない。現実の生をおくる人間が、現実に存在するかぎりそれ以外になしようがない仕方、からだをもって、あるいはからだとして行なう、目立たない営みが語られていた。そうした営みが、人間の実現しうる完全性の証なのであった。

最後に、そうした営みに浸透する気分が楽しみや喜びであること、そこに倦怠や退屈はないこと(3.3.4)を振り返りつつ述べておかねばならない。というのも、本稿は2.3において、女性たちがおぼえるとされる「不快感」に言及し、関連の考察を試みたからである。

*21 その数編が田島 [3] に収められている。

エックハルトは「一つの被造物が所有できる一切のもの」と語っていた(3.3.2)。ありふれた営みをよくなしうることが、それを残らずそなえていることを示すのだった。一般に「被造物」という語が男性を指示するのか、女性を指示するのか、男女の区別無く人間を指示するのか、これは容易には答えがたい。開闢の物語からすれば、それはまず第一に男性を指示するのかもしれない。けれども、エックハルトが用いた「被造物」という語が指示していたのは、テキスト上の事実として、疑いなく女性である。なおかつ、マリアという女性ではなくマルタという女性が、「一切のもの」を残らずそなえているのである。ここに一つの転換を読み取らざるをえない。2.3で「いろいろな立場を逆転させるイエスの新しい世界秩序」というアームストロングの言葉を引用したが、言ってみれば、エックハルトによって、その新しい世界秩序に再び転換が施されているのである。この転換は注目に値する。

しかしながらこの転換は、同時に危険なものでもありうる。「神学の学び」の内にあると自負する男性たちにとって、これは危険であろう。同じところにいると自認する女性たちにとって、危険であろう。そして誰よりも、現にこの世界で日々ありふれた営みを積み重ねている人々(ここには女性も男性も含めてよかろう)にとって、これは危険でありうる。こうした転換がこれらの人々に対して欺瞞として働く可能性は過去の歴史においてあったし、現代の世界においてもある。むしろ、その可能性は現実化してきたのであり、している、とする方が正しい。「不快感」の淵源はおそらくここであろう。

だが、*besonnen* という語をもって指示されていたことをめぐって、もう一度考え直してみる必要もある。日常の営みに楽しみや喜びといった気分が浸透しうることは、誰もが経験する人間的現実存在の事実であろう。これは否めない。ありふれた営みを、その場面その時点としてまっとうに歩み抜くことには、そうした気分がともないうる。そしてそうした事実は目立つ事柄でもない。なるほど同時に、倦怠や退屈もそこに浸透しうるとしなければならない。確かにわれわれはそれらを経験する。これも、人間的現実存在の事実であろう。エックハルトにしたがうなら、前者の積極的な気分こそが本質的で完全なものである。人間が世に持っていくことの基本的次元にある営み、*urhuman* な営みに、そうした積極的な気分が帰されることは確かに諾える。しかしさらにもう一步立ち入って、エックハルトにしたがうなら、すなわち彼の思想の要点にしたがうなら、妨げられないこと、離れることが肝要ではなからうか。そしてマルタがそうしていたように、沈黙せず語ることが肝要ではなからうか。上に述べた欺瞞に抗するには、言葉をもって語り出ることが方策の一つだと思われる。

再び最初の問いを繰り返さなければならない。ありふれた、世に持っていくことの基本的次元にある営みを、われわれはどのように捉えるのか。どう位置づけるのか。それは人間の現実存在にとってどのような意味をもちうるのか。本稿筆者は男性である。私はこれらの問いにどう面してゆくべきなのであろうか。

参考文献

- [1] カレン・アームストロング. 『キリスト教とセックス戦争——西洋における女性観念の構造』. ポテンティア叢書 41. 柏書房, 1996. 高尾利数訳.
- [2] バーバラ・ドゥーデン. 『女の皮膚の下——十八世紀のある医師とその患者たち』. 藤原書店, 1994. 井上茂子訳.
- [3] マイスター・エックハルト. 『エックハルト説教集』. 岩波文庫青 816-1. 岩波書店, 1990. 田島照久訳.
- [4] Peter Fischer, editor. *Technikphilosophie*. Reclam-Bibliothek 1566. Reclam, 1996.
- [5] Dietmar Mieth, editor. *Meister Eckhart*. Walter Verlag, 1979.
- [6] C.A. ニューサム, S.H. リンジ(編). 『女性たちの聖書注解——女性の視点で読む旧約・新約・外典の世界』. 新教出版社, 1998. 加藤明子・小野功生・鈴木元子訳、荒井章三・山内一郎監修.

- [7] Josef Quint, editor. *Meister Eckhart—Deutsche Predigten und Traktate*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1985.
- [8] マルク・リシール. 『身体——内面性についての試論』. ナカニシヤ出版, 2001. 和田渡・加國尚志・川瀬雅也訳.
- [9] 新約聖書. 『福音書』. 岩波文庫青 803-1. 岩波書店, 1963. 塚本虎二訳.
- [10] 上田閑照. 『マイスター・エックハルト』. 人類の知的遺産 21. 講談社, 1983.